裁之

雪

さのしらにおいも人まね旭の秋つきて山雪にわかれつみする

義省

霞

うらひ月の鮮もおもしろに雪ゆゑ霧やいくへ立かさぬらし

朝陽

雲

ひかし山かさなる雲にうつもれつ花の雨やいつとなるらく

信恭

いけ

うはしかん花のこゝみの池水にわかれまくもるけさもなつし

三彦

霖

うらみつね舎人やわかるみり色ぬきて闇をわかるをくるま

正良

もり

祢にこそ、おいその表の付ぬなく好る群ハふりせさりけり

篤孝

霞

身にしこそ、の所まものハ夕くれの袖のつゆかく萩のよ風

白鈴

月

あさ里出て月みる妹のあや衣ぬひとるむのいろもまはゆく

盛彦

こゝは

こゝれ上にこのつもみちをゆひさして秋のつきをかゝる代士

清矩

霰

いらなせんいまもこゝるへきやとふるきさのゝ法にしくれふりあぬ

保水

やま

立のかゝるゝふりをしけこ山ゝつゝやく嵐うまの鞍にみえて

是與

雪

とりし火のおそてもちりのつもらぬハ雪のよこんの机也けり

文久三年癸亥孟春　吉学彼集録